

STAGE

AMUSEMENT SQUARE

アデレードフェスティバルを終えて

〈文／「創造集団パノラマ屋」お頭・安達良春〉



▲アデレードの「スペース劇場」にて。開演の前に「タブロー巻き」に集中する出演者たち。この手巻が作品のディテールを決定するため、優に一時間はかかる大変な作業だ。

去年の夏の事だ。知人がモレキュラーシアター（代表・高沢利栄）の公演に参加するという。実は、名前は聞いた事はあるものの公演自体は観た事がなかった。練習に行っている知人の話を聞くぶんには、どうやら今まで私が観てきた舞台とは全くタイプの違うモノらしかった。まあ、知り合いも出演してる事だし、と何の気なしに公演に足を運んだ。夜遅い公演だったのを覚えている。四方をブラインドに囲まれた正方形の舞台。真下からあてられる照明。パイプ椅子とプリンター。あくまでも無感情に発声される、本から抜粋されたらしい台詞。無機質な第一印象とはうらはらに、観終わってみれば妙にエロティックな感じさえする舞台だった。正直な話、理解はできなかったものの、興味を覚えた。次回の東京公演のスタッフを探しているという話を聞いていた私は「手伝ってみようか」という気になってしまっていた。今思えば、これが私とモレキュラーシアターの出会いだった。

東京公演は、三日間で三作品を上演するというハードなものだった。右も左もわからずただひたすらに走りまわり、作品について考えてみる余裕を自分が持てなかった事が悔やまれる。ただ一つ強く印象に残っているのは、演出の豊島重之さんの言っていた「絶対演劇」という言葉だ。自分でもいろいろと考えてみたが、今だに答えはもうろん、手がかりさえ得られずにいる。

ともかく公演は無事に終わり、ホッとしていた頃、ニュースがまいこんできた。トーキョージャーナルという雑誌の演劇賞をモレキュラーシアターが受賞したという。安堵感ばかり先に立っていた私はたいした感慨も持てずにいたのだが、それに続く言葉が私を驚かせた。

「二年に一度、オーストラリアでアデレードフェスティバルというものが開催されているんですが、それに招待される事になったんですよ」

「へえ、凄いですね……。ちょっと待って下さい。俺も行くんですか!」

アデレードフェスティバルというのは、総裁・エリザベス女王、副総裁・オーストラリア州知事という国際交流を目的とした大々的なものであるという。しかも街全体が言わば大きな会場となり、約三週間にわたって、演劇、ダンス、オペラなど世界の第一線で活躍し注目をあびている人々が集まり公演するという。自分がそんな所へ行くのはひどい場違いな気がした。

「食費は場合によって自己負担となりますが、それ以外はオーストラリア

▼「スペース劇場」ホワイエに展示された「ドローイング」。劇中でリアルタイムに描かれた筆跡を、安達（前列左端）が中心となって作品に仕上げたもの。



政府から出され、渡航費は日本側の助成金から出ます。各国の舞台も観れるし、こんな機会はまたとありませんよ」確かにその通りだ。が、行ってもいいの、現実問題として行けるのか？ 私はふんざりがつけられずにいた。

会社の理解も得られ、気が付いたら私はトランクを持ってオーストラリアに立っていた（機内サービスのウイスキーで半分酔っぱらい状態だったが……）。そして私は今八戸に居る。

自分が係わった舞台について説明や紹介をするのは実はしたくないと思っ
ている上に苦手であるのだが（舞台は観た人それぞれのものであるし、もし説明を必要とするならば、その作品は未完成なのだから、あえて書くならば、今回上演した「ファサード・ファーム」

は、ウィットカッツィという肖像画家が自分で撮った自分の写真をテキストとして造られた作品である事、また、キヤスト、スタッフが造りあげたものが、舞台だけにとどまらず、Drawingという形でも、公演回数分、九つの作品として造りあげられたという事が特筆すべき事だ。そして、好評のうちに終えられた事もつけ加えておく。言葉足らずではあるが、後は写真から想像していただきたい。そして興味を持った方は是非次の機会に足を運んでいただきたい。

「世界レベルの演劇というものは、もう言葉が理解できないからわからない、というところを越えている」という様な事を今回一緒に参加したメンバーの一人が言っていた。もちろん言葉

◀シドニーの「国立劇場大学=NIDA」での「ワークショップ・フォーラム」。
今年のアカデミー賞グランプリのメル・ギブソンはこのNIDAの出身。モレキ
ュラーの作劇法を学んだ俳優・監督の卵たちの中から、第二、第三のメル・ギ
ブソンが生まれるかもしれない。

を理解できたにはこうした事はないが、私も他のいくつかの作品を観て楽しむ事ができた。気に入ったものをあげる
と、まずワーキングダンス（残念ながらチケットが手に入らず、屋外公演なのをいい事に、会場の外から少しだけのぞいてきた）。これはダンスというよりも宗教儀式である。歌があり、白い服を着た人々がひたすら廻り続けるというもの。おそらく、廻る事で一種のトランス状態となり、神に近づこうとしているのだろう。当然ながら出演者には一片の感いも感じられず、美しく神秘的で、派手さも無く本当にただ廻っているだけなのに魅きつけるものがあった。

横たわっているところから始まり、再びベッドに横たわって終わる。その間に観客は入れ替わり、おそらくは同じ作品（もしかしたら別の作品？）が繰り返される。こういった何気ない小品もあるフェスティバルの運営に好感を覚える。

特に気に入った作品はこの二本であるが、他の作品も興味深いものだった。ただ難を言えば、娯楽性を追い求めるあまりか（あるいは表現方法の最終地点なのか）、バイオレンス、セクシャリティ等といった、派手さが目につき、どうしても大味な感じが私にはした。もちろん娯楽性を求める事も大事だが、そういった形でなくてもエンターテイメントたり得るのではないだろうか。そういう点で、パペットカンパニーの作品（人形とペーパーアニメーションを使ったもの。英語力の無さを嘆きながらも楽しめた、モレキュラーシアターの作品は成功だったと思う。念のためつけ加えるなら、バイオレンス、セクシャリティといったものを否定している訳ではない。どちらか人間の本能を直撃するものであり、演出方法としても効果的であろうし、単純に好きか嫌いかと聞かれれば好きである（もちろんやり方にもよるが）。ただ、そういったものを受け入れている現代で次に最先端と言われるのは何なのか、揺るがないもの」とは何なのか、せめて手がかりだけでもっとたくさん観ることができるとは期待していただけに少し残念だ。余談ながら、グルメプーラムも終わり、バイオレンスとセクシャリティが受け入れられ、次は何だろうか。やはり睡眠と排泄か？それとも歴

史は繰り返すのだろうか？

これまでに様々な舞台を観る機会に恵まれてきた。多くの人達と同じ舞台を造る機会に恵まれてきた。一人で舞台に立つ機会に恵まれてきた。にもかかわらず私は限りなく素人に近い（最近ではもうこんな逃げもできないが）。本人は、街で石を投げれば当たる様な極普通の人間のつもりである。それでも無事海外公演を終えられた。もちろん自分の力は微々たるものだったが、そこには間違いなく自分が居た。このチャンスを与えてくれたモレキュラーシアターにこの場をかりて感謝します。

チャンスは何処にでも転がっている。舞台上に音楽、映画に仕事。本もあるし、パチンコだってそうだ。老いも若きも男も女も、テレビを捨てて街へ出よう。そこには必ず何か面白い事、凄い事がある。

さて、俺は明日は何をしようか！

三年ぶりの来ハノ芝居仲間クレイジージャップINスペースベン

（文）芝居仲間クレイジージャップ・木村勝一
あの伝説の野外劇、LIVE IN 長者山「ノックアウトQ」より丸3年、クレイジージャップは東京、八戸とそれぞれ势力的に活動してきたが、今回は久々のジョイント公演である。

東京組は「旅組」と旗を揚げ、和歌山を皮切りに滋賀、東京、仙台、石巻そして八戸と約1500km、日本縦断旅芝居に初挑戦する！

演目は昨年4月東京公演にて大好評を得た「道の極から」。ご存じ、役者の三浦哲郎の初演出によるものだが、今回はその「旅版」である。

ストーリーは、二人の駆け出しのチンピラ（大門賢二、間晨光）が渡世の義理で、落語家（すんまつ）のもとに弟子入りお笑い芸人を目指す。初舞台の日二人を待ち受けていた事件とは：笑い、涙、友情、そして芸の道とは何かを問う、女優真保直子が作・演出

迎える八戸組はスペースベンを中核に活動再開、まずその代表・田中勉と公務するドラマ、石村巧を主役に据え、当地の若手ミュージシャンの顔や米国人女優らが揃い、新たな演劇シーンをつくる試みである。

あらすじはある田舎街に起きた実話を徹底取材、奇しくも「カッコーの巣の上で」の様な話が身近にあった！バブル崩壊後の不確実性社会の日本が抱える心の病は今やボーダーレスである。何が正常で、何が狂っているのか？最近のテーマである。

花見、ゴールデン・ウィーク明けの週末には、ちよっとホロ酔い加減で結構、浮かれ気分でもなお結構、クレイジーな奴等に合いにスペースベンによつてみませんか！

花見、ゴールデン・ウィーク明けの週末には、ちよっとホロ酔い加減で結構、浮かれ気分でもなお結構、クレイジーな奴等に合いにスペースベンによつてみませんか！

花見、ゴールデン・ウィーク明けの週末には、ちよっとホロ酔い加減で結構、浮かれ気分でもなお結構、クレイジーな奴等に合いにスペースベンによつてみませんか！

スペースベン・5月の予定

●5月3日

題名／ひま人Vol.7 E.1
出演／田中勉

●5月10日

題名／未定
出演／館かずと（我楽多屋）

●5月17日、18日

芝居仲間クレイジージャップVol.10

一旅組一（TOKYO）

題名／旅版・道の極から
作・演出／真保直子

出演／大間賢二、間晨光（信博改め）、すんまつ
時間／17日、夜7時30分 18日、夜6時30分

料金／大人¥2,000、学生¥1,500

一勝一組一（HACHINOHE）

題名／アン・アースリー・パラダイス
～この世の天国～

作・演出／木村勝一

出演／田中勉、石村巧、飯田真弓、シャラッタ・サンネンシャイ、橋本一恵（夜・DANS）
アニキ石岡（玉露）

●5月24日

題名／富沢知成アコースティックライブ
構成・演出／富沢知成

●5月31日

題名／ひま人Vol.7 E.2
出演／田中勉

※表示がないものは全て、時間・夜7時30分、料金¥500

＜問い合わせ＞〒031 八戸市柏崎1-11-8
TEL & FAX 0178(43)9876